深イ～話！ No.14

――「お母さんの遺骨より」（おしょうさんも驚いた３１の生き方より）――

受話器から聞こえる声は明るい。
「住職さん、今年も母に会いに行きますので、よろしくお願いします。兄弟そろって参りますので」
彼らは早朝やって来るに違いない。私は朝の勤行を終えると、位牌堂に向かい、長年預かっている遺骨を手にする。兄弟のお母さんだ。

もう十二年前のことだが、忘れることはない。寒風が荒れる日の午後、玄関に出てみると、三人の少年がふるえて立っていた。初めての顔だ。思わず声をかける。
「どうしたの？　さあ、入りなさい」
書院でお茶をすすめる私に、年長の少年が告げた。
「住職さん、母を預かってください。住職さんなら引き受けてくださると聞いてやって来ました。ボクたち、三人兄弟なんです。私が長男、右が次男、左が三男です」
次男が両手に余る大きな荷物を抱いていたことは初めから気づいていた。
「お母さんの遺骨です。住職さん、ボクたちには親戚もありません。いえ、本当はあるのですが、誰からも見捨てられました。家もお墓もないんです。お母さんの遺骨をおさめる所はどこにもありません。このお寺で預かってください。兄弟三人が成人したら働いて御礼します。お願いします」
次男、三男も声をそろえた。
「お願いします」
見ると三男は大粒の涙を流している。
彼らは母子家庭で育った。幼い日、両親が離婚。親権は母に認められたが、男子三人の子育ては苦難の連続だったという。
母は一日三種の仕事をしていた。早朝六時から午後三時まで仕出し弁当店で働き、終えるとクリーニング店のパートを午後七時まで。そして夜八時から十一時まで居酒屋に。
けれども、長男 N 君が高校二年生、次男 S 君が中学三年生、三男 K 君が小学六年生になった時、母が倒れた。末期ガンの宣告。
死期を悟った母が病室で三人の手を握って語ったことは――。
「みんな、ごめんね。母さん、あなたたちが大人になるためにはどんな苦労だって平気だと思ってた。でも病気には負けたみたい。母さんね、とっても幸せだったのよ。どうしてか分かる？　あなたたち三人の男の子がいたからよ。あなたたちが母さんをいつも幸せにしてくれていたのよ。本当よ。だから母さんのことを不幸な人間だったなんて思わないでね。

Ｎ君、Ｓ君とＫ君のことお願いね。責任重大よ。だって長男に生まれちゃったんだから仕方ないでしょ。
Ｓ君、高校受験だね。学費はあるから心配しないで。ガンバレ。
Ｋ君、二人のお兄ちゃんに甘えなさい。甘えていいのよ。兄弟だもの。
三人にお願いがあるの。
お母さんの遺骨はね、四人でよーく遊びに行った九十九里浜から海に流して。母さん、お墓まで用意できなかったから、ごめんね。お願いよ。母さんとっても幸せだったよ。
あなたたちがいたからね」
　葬儀は兄弟三人とＳ君のクラスの担任の先生一人。静かな葬儀だった。
　遺骨を手にした時、三人の心の中に迷いが生まれる。
　三男のＫ君が二人にうったえた。
「ボク、イヤだ。母さんと一緒にいたい。海へ流したら母さんともう会えないんだもの。流すのやめよう！」
　長男、次男の思いも同じである。
　母の親戚をいくつか知っていた。
　Ｎ君が電話をかけて実状を話すと、どこからも思わぬ答えが返ってきた。
「とっくに縁が切れてるんだ。気の毒だけど、あんたらも今後、関係ねえと思ってくれ、いいな」

　荷物は、白い布に包まれた遺骨だった。私は本堂に燈明と線香を整え、遺骨を安置して彼らに告げる。

「さあ、お母さんのご供養をさせていただくからこっちに座りなさい」
大衣に袈裟を着けてあらわれた私の姿を見てＮ君が声をかけた。
「ボクたち、お布施がありません」
「お布施か？　三人の出世払いでいいよ。さあ、手を合わせて」
　遺骨を位牌堂へ安置すると、三人はいつまでも母に向かって手を合わせている。
　私は一つのことが気にかかっていたので思い切って問いかけた。
「君たち、これからどうする？」
　長男のＮ君が答えた。
「ボクは高校を中退して働きます。二人はとりあえず別々の養護施設でお世話になります」

　あれから十二年。兄弟三人はたくましく社会人になっている。
　玄関から声がした。
「住職さん、母に会いに来ました」
慈母観音になった彼らの母は、わが子をいつも見守っているにちがいない。
釈尊の“母あるは幸いなり”の一語が思い出される。